ゆるしと侵害者への否定的評価との関連

○高田菜美

(1 関西大学大学院心理学研究科)

キーワード: ゆるし, 否定的評価, 侵害反復

The relation between forgiveness and their negative evaluation for transgressor.

Nami TAKATA

(1 Graduate School of Psychology, Kansai University)

Key Words: forgiveness, negative evaluation, repeated transgression

目 的

人が他者から何らかの侵害行為を受けると、侵害された人（以下、犠牲者）は侵害した人（以下、侵害者）に対して、“ゆるせなさ”（unforgiveness）を抱くことがある。ゆるしを目的とした臨床的介入もなされているが（e.g., Dibiaccio, 1994）、それらはゆるしありきで進められており、ゆるしの概念、構造などといった特徴の記述が不十分であるのが現状である。また、人はある心情を抱く相手に関連する（属する）物事であれば、同様の心情を抱きやすい（e.g., 「坊主憎けりや袈裟まで憎い」「あばたもえくぼ」）。しかしこれがゆるしという情動、認知、動機づけなど多側面を包括する概念においても同様かは明らかでない。

本研究では、ゆるし状態の特徴把握の一助として、対象へ抱くゆるせなさという否定的評価がその人物の客観的には中性的もしくは肯定的とみなされる態度、および予測される態度に対する評価に与える影響について検討する。

方 法

対象者 関西地区の大学生 62 名（男性 17 名、女性 45 名）

調査項目

ゆるし尺度: McCullough, Root, & Cohen (2006) の TRIM (Transgression-Related Interpersonal Motivation) の日本語版 (J-TRIM; 高田・小杉・徳田, 投稿中)。侵害者に対する犠牲者の回避的動機づけ 7 項目、慈愛的動機づけ 6 項目（逆転項目）、報復的動機づけ 5 項目の 3 因子から成る。5 件法。

侵害者の言動: 侵害者の中性的もしくは肯定的言動への犠牲者の評価を測定するため、以下の 3 点に対し、それぞれ 7 件法で回答を求めた。1. 謝罪（侵害者の謝罪の有無、謝罪を妥当なものと評価するか）2. 反応是認（犠牲者の侵害者に対する否定的反応の有無、その反応を侵害者が妥当な反応だと捉えたと思うか）3. 侵害反復（侵害者が同様の侵害行為を繰り返すと思うか）。

結 果

分析には統計ソフト R 3.1.0 を用いた。

J-TRIM の平均点は全体が 55.87 点、回避的動機づけ因子が 23.23 点、慈愛的動機づけ因子が 19.97 点、報復的動機づけ因子が 12.71 点であった。

謝罪の有無を尋ねたところ 9 名が「あり」と答え（14.5%）、反応是認では 35 名が「あり」と答えた（56.45%）。

J-TRIM と反応是認、侵害反復の相関係数を算出した（表 1）。その結果、侵害反復と J-TRIM 全体、慈愛、報復の間にそれぞれ弱い正の相関関係が認められた。一方、反応是認と J-TRIM の間に有意な相関関係はみられなかった。J-TRIM 得点の性差を確かめるため、t 検定をおこなった。その結果、J-TRIM 全体、回避、慈愛、報復に有意な性差はみられなかった（表 2）。

表 1. 反応是認、侵害反復と J-TRIM の相関係数

	J-TRIM			
	全体	回避	慈愛	報復
反応是認	-0.07	-0.20	-0.03	0.11
侵害反復	0.33*	0.16*	0.36*	0.36*

* $p < 0.05$

表 2. 性別と J-TRIM の t 検定の効果量と信頼区間

	J-TRIM			
	全体	回避	慈愛	報復
効果量	0.08	0.15	0.06	-0.03
下限	-0.48	-0.41	-0.50	-0.59
上限	0.64	0.71	0.62	0.52

考 察

謝罪ありと答えたのは全体の 14.5%であったことから、犠牲者は侵害者の謝罪がない場合にゆるせなさを感じる人が多い、もしくは謝罪そのものが生じにくい可能性が示された。

相関分析の結果、侵害反復と J-TRIM 全体、慈愛、報復との間に正の弱い相関係数が認められたことから、ゆるせなさを強く抱く人は、侵害者が同じ侵害を繰り返すとみなしている可能性が示された。ここから、侵害者へ否定的評価をしている場合、侵害行為以外の侵害者の言動に対して、犠牲者は否定的な評価を下しやすと考えられる。しかし回避との相関関係はほとんどみられなかったことから、侵害者の侵害以外の言動に対して、回避と報復は異なる機構を有していると考えられる。また、侵害反復を予測するからこそゆるせなさを抱くことも考えられる。

また、J-TRIM と反応是認に有意な相関係数は認められなかった。反応是認は犠牲者が侵害者による反応是認の程度を目にしており、ここから、侵害者の態度への予測は否定的となるが、実際におこなわれた言動への評価とゆるせなさに強い関連はない可能性が考えられる。

J-TRIM の得点に性差はみられなかったことから、ゆるせなさに性差はなく、侵害のレベルによって影響を受けるものである可能性が示された。

今後の課題として、ゆるせなさの違いをどう扱うかが挙げられる。尺度の得点の高低からゆるせなさを量的違いとみなすのか、もしくは低群と高群に質的な違いを仮定するのか、今後明らかにしていきたい。

引用文献

- McCullough, M. E., Root, L. M., & Cohen, A. D. (2006). Writing about the benefits of an interpersonal transgression facilitates forgiveness. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 74(5), 887.